

大学のグローバル化のための取組と指標に関する勉強会 於徳島大学
2014/12/04

学士課程の取組から見たG30の 理想と現実

九州大学 基幹教育院 小湊卓夫

G30の概要

- 大学の国際化、留学生受け入れの拠点形成を目的とし、特に英語で行われる授業のみで卒業ができるコースの設置が求められる
- H21～H26の5年間
- 採択は13大学
- 年間3億円程度の補助金（大半は人件費）
- 学部は工学部、農学部、大学院はほぼ全ての学府で設置

数値目標と結果

- 留学生数1,292人→1,972人（H32年までの目標3,900人）
- 外国人教員 180？→216人（H32年までの目標350人）
- 国際教養学部の設立→平成25年度までに設置予定だったが、現在は平成29年度開設予定
- 当初から困難と思われていた目標

なぜ困難な目標をたてるのか

- 目標の設定において、異動官職の職員が大きな力を持つ←中央からの情報収集力とネットワーク力
- 現場で行われている教育の現状が見えにくいため、判断基準は競争的資金の目的(大学の目的ではなく)そのものとなる
- いきおい、絵に描いた餅を提示、プロジェクト終了時には当事者は不在、課題だけが積み重なる
- 責任の所在が不明確なだけでなく、学内のマネジメント体制に課題がある

外国人教員のマネジメント

- FDは半期ごとに実施：盛んにディスカッションが行われる
- おおむね教育には熱心
- 日本語による会話が不十分なため、業務を任せられないor任せてもやってもらえないことが多い→職務記述書が不在・不明確なため、業務範囲の理解に齟齬が生じる
- プロジェクト終了後、継続雇用された教員は半分強

カリキュラムのマネジメント1

- 国際化を見据えた新たなカリキュラムを作るのではなく、既存のカリキュラムをそのまま援用し授業を英語で実施 それに伴う課題も
- 数物系の学力が日本人の学生と比べ著しく劣る学生が散見→補習授業の充実(大学院生のTA雇用)
- 各科目から課題が多く出される一方、時間割は日本人学生並みに過密
- カリキュラムの見直しを進め、若干緩和

カリキュラムのマネジメント2

- 授業担当の外国人教員の一部が継続雇用されなくなったため、担当者調整が困難になりつつある
- 本来、部局で雇用された教員は継続雇用を原則としていたが、実際は大きく異なる
- そのため一部の科目を廃止
- 科目の分担を部局割当てにしていなかったため、調整が難しくなっている

学生1

- とにかく元気 授業中でも盛んに質問が出る→
途上国出身者も多いため、勉強熱心 日本人学生より学力が若干低くても追いつく(ただ日本人と同じようには出せない Moocも参考)
- 一部の授業は日本人学生との混合クラスだが、日本人学生はディスカッションにほとんどついていけない(TOEFL500点台、しかし雑談は出来る)
→日本人学生と留学生の交流による相乗効果は授業以外のところで検討が必要

学生2

- 今年、第1期生が卒業したが、多くが大学院進学→優秀な学生はほとんど米国の大学院へ進学
- 少人数で結束力が強いため、これから同窓会のマネジメントが重要となる
- 受験に関して特定国の高校とのつながりが強くなることで、受験者が増加傾向
- 出身校への訪問とプロモーションの地道な努力が必要

理想と現実

- 教育の国際化に関し、組織としての理想はほとんど描かれない→お金(外圧)と人事によって動く、達成目標は理想を現実化するためのもの？
- 何のための国際化なのか？国としては大学の競争力向上のためという名目だが、個々の大学にとって必要な目標はもう少し具体的なもの？特に教職員による検討が急務？
- 教員・学生共に外国籍を受け入れることの課題
多数：言葉の問題よりも、大学としての方針が問われる、均質ではないことを前提とした思考と行動、異文化理解は教職員にこそ必要